

京仁一体化への取り組み

京城と仁川をブロック化して一大工業地帯にしようという永井照雄府尹(市長)の構想は仁川中学新設運動と並行して着々と進んだ。昭和9年度から花町、宮町の海面を埋め立て、続いて万石町、花水町、松林町横の会年を埋め立てて広大な工場用地を生み出した。工業用水も漢河から取り入れ、縦横に排水管を敷設して企業誘致を進めた。

この結果昭和12年になって仁川機械製作所、朝鮮機械製作所、朝鮮製鋼所、日本製粉、朝鮮車両、片倉工業、仁川窯業、日立製作所、芝浦製作所などが進出してきた。万石町には昭和6年、仁川初の近代工場として東洋紡績が進出していたが、それに隣接して大規模工業団地が出現したのである。永井府尹はこの一帯を北仁川工業地帯と命名した。そうしてこれら工場への資材搬入や製品出荷のために、「北仁川港」の整備も進めたのだった。

永井府尹はさらに京仁一体化を推進するという目的で昭和11年、富平などの周辺地域を仁川府に編入する大合併を行った。仁川の京城寄りにある富平地区は平地が広がり工場誘致に適していたからだった。これにより仁川府の面積は6.1平方キロから27.35平方キロへと4倍以上も拡大した。

昭和13年(1938)、永井府尹はこの富平に小倉造兵廠の分所という形で兵器の製造工場を誘致することに成功した。日本の手によって満州国が建国され、軍備拡充が叫ばれていた時代である。仁川港をもち、京城をバックにし、満州国にも近い仁川は地理的にも優れていた。小倉造兵廠分所はすぐに仁川造兵廠に格上げされた。仁川造兵廠周辺には下請けのための機械工場があつという間に集まった。

仁川で重工業が発展するにつれ、工場で働く人を教育する施設が必要になり、永井府尹は昭和15年、大和国民学校の一部を仮校舎にして職業訓練所を設立した。翌年には寿宝山東南に立派な校舎を新築、移転している。

こうした施策で仁川造兵廠は短時間のうちに1万人を超える人が働く大工場になったのである。そこでは主として小銃、銃弾、銃剣(帯剣)が作られた。日本各地から陸軍の技術者と兵、そして従業員が集められ、宿舎が建てられ、富平小学校も新設された。

仁川造兵廠の生産力がすさまじかったことを示す統計として銃剣生産本数があげられる。ここで作られた銃剣は30年式と呼ばれる明治30年から生産されたタイプだったが、仁川造兵廠では終戦までに45万本が作られた。長い年月をかけて日本全国で作られた本数は880万本とされているから、5%強を短期間で生産したのである。星の形の中に砲弾を表すデザインの仁川造兵廠マークのついた銃剣はまだたくさん残されている。

この仁川造兵廠では終戦直前、仁川商業の在校生が勤労奉仕で駆り出され、兵器生産に従事している。仁川造兵廠の出現もあって京仁線の沿線で人家がないのは数キロメートルにすぎなくなった。

永井府尹は過労のせいか風邪をこじらせ昭和17年の正月の3日、急逝した。府葬は8日、府尹が設立に尽力した仁川中学校で行われた。現在のインチョン市は韓国有数の重工業地帯として発展している。永井府尹の構想がまさに結実しているといえるのではないだろうか。

朝鮮機械製作所 1

仁川に進出してきた企業のなかで、非常に特異な活動をした企業として朝鮮機械製作所が挙げられる。なにしろ、海軍ではなく陸軍の第七技術研究所が、平仮名のゆを○で囲んだ暗号「まるゆ」の名称で秘密裏に開発した潜水艦「三式潜航輸送艇」を建造するという特別な業務を行ったのである。

朝鮮機械製作所は昭和12年(1937)6月に設立され、登記上の本社は京城に置き、仁川の萬石町に工場を建設した。朝鮮半島に多数存在する鉱山を開発し採掘する機械や土木機械を生産するのが目的だった。親会社はボイラーや破碎機で独特の技術を持っていた東京都城東区(現江東区)大島の横山工業所とされているが、これはダミーだった可能性がある。これについては後に詳述したい。

折から朝鮮半島は鉱山開発ブームが起きており、三井系の三成鉱業、日本鉱業、三菱金属鉱山などが争って金、銀、

銅、亜鉛、稀少金属などの鉱山を開発していた。また満州(中国東北部)でも日本から開拓団が入り、土木工事が盛んに行われていた。そうした流れに乗って朝鮮機械製作所の売り上げは好調だった。設立後 1 年も経たないうちに当初の資本金 50 万円から 300 万円に 5 倍増資し、さらに 2 年後、倍額増資をしている。創業直後から利益を出し、2 年目から 6% の配当を実施した。

このホームページ「仁川を想う会」の管理人、井上浩一さんの母方の祖父、森本寛さんは東京市役所を退職して 13 年 3 月、朝鮮機械製作所に入社、書記(事務員)として仁川に赴任している。井上さんは「祖父がなんで仁川に行ったのか、いきさつはわからない。秋田清代議士の家で書生をしていたこともあり、その関係ではないか」と言う。

朝鮮機械製作所の初代の社長は森輝である。森輝はほかでもない、昭和電工の創設者、森轟昶(もり・のぶてる)の実弟である。昭和電工の前身の昭和鉱業などいくつかの会社の取締役を兼務しながら仁川に来て朝鮮機械製作所をみていた。しかも有力紙二六新報の経営にも関与していたようである。森本寛さんもまた、中央大学法学部に在学中、夜は二六新報で働いていたという。このときの働きぶりを見ていた森社長が森本さんを引っ張ったのではないかと筆者は推察している。

森本さんが父母に出した手紙によると、仁川は相次ぐ企業進出で大変な住宅難だったようである。森本さんは松坂町から花水町、萬石町へと 2 度、3 度と引っ越しているが、これは幹部社員にふさわしい家をとるという会社側の努力の結果なのであろう。

森本さんの手紙では、昭和 14 年の段階で朝鮮機械製作所の従業員は 1000 人を超えていた。森本さんは昭和 17 年、労務課長に昇進、その直後に大量の従業員採用を行っている。内地にも出張して 5、600 人を採用したという手紙があるから、その時点で従業員は少なくとも 1500 人から 1600 人になっていた筈である。その後の潜水艦建造を考えると、終戦時には 3000 人規模の大企業になっていたと思われる。

昭和 19 年から 20 年にかけては、仁川中学校の在校生が学徒動員により朝鮮機械製作所で働いている。

朝鮮機械製作所 2

朝鮮機械製作所に陸軍の仁川造兵廠から「潜水艦を造れるか」と打診があったのは昭和 18 年 6 月ごろだった。業績は飛躍的に伸びていた。親会社といわれる東京の横山工業所の売り上げを大幅に上回る 1000 万円を超え、横山工業所社長の横山公雄が仁川に来て社長を兼務するようになっていた。製品も巻き揚げ機、輸送機、各種ポンプ、碎鉱機、グラインダー・ミル、鋳鋼機、分粒機、圧搾機、真空濾過機、攪拌機、製鉄機、製鋼機、セメント機械、化学工業機械、製缶機へと広がっていた。海軍ではなく陸軍が潜水艦を?という疑問はあったが、朝鮮機械製作所は「設計図があれば可能」と返答したのだった。

「まるゆ」計画は、昭和 17 年 8 月から始まったガダルカナル島での戦いを教訓に練られた計画だった。ガダルカナルの戦いでは、食糧、弾薬など物資を積んだ輸送船が連合軍の攻撃により悉く沈められ、補給が満足にできなかったのが敗因になった。そのなかで成功率が比較的高かったのが潜水艦による輸送だった。しかし海軍は「潜水艦は敵艦攻撃に使うのが本来の任務」として輸送に使うことには消極的だった。このため陸軍参謀本部内では同年末ごろから陸軍独自に輸送を目的にした潜水艦を建造しようという構想が生まれたという。

陸軍参謀本部は 18 年に入ると本格的に動きだした。陸軍第七技術研究所(七研)に海軍には内緒で開発するよう命じたのである。七研は第一次世界大戦でドイツが開発した輸送潜水艦の図面を取り寄せ参考にしたほか、珊瑚採取用に開発された「西村式潜水艇」の設計者である西村一松氏の協力も得て僅か 2 カ月で基本設計図を作り上げた。

基本設計によると全長 41.41 メートル、全幅 3.9 メートル、排水量 274.4 トン(水上)、370 トン(水中)、速力 7.5 ノット(水上)、3.5 ノット(水中)、航続距離 2800 キロメートル、設計深度 100 メートル、積載量 24 トン、乗員 23 人となっており、機関

はヘッセルマン型エンジン 2 基で 400 馬力となっていた。ヘッセルマン型エンジンは石油掘削に使われるエンジンでガソリンだけでなく軽油や灯油でも動かせるという長所があった。

陸軍らしい設計の特徴としては、乗組員の居住空間をできるだけ減らし、その分積載量を多くしたこと、建造期間を短くするためにブロック工法を採用、いくつかの部分に分けて工場で作りそれをリベットでつなぐという仕組みにしたこと、出来るだけ木材を使い重量を軽くし、レーダー探知機で察知される危険を減らしていることなどが挙げられる。

設計図が完成したので陸軍参謀本部は建造してくれる造船所を探したが、全て海軍が押さえていて引き受けるところは無かった。そこで建造可能な工場を風潰しに調べ、最初に見つけたのが日立製作所笠戸工場だった。同工場は機関車製造工場だったが海に面しており、乾ドックさえ作れば建造できるのだった。二番目に見つかったのが日本製鋼所広島製作所だった。この工場は火砲を製造しており、やはり海に面していた。続いて東京の安藤鉄工所が見つかり、最後に朝鮮機械製作所が候補になったのだった。

仁川は干満の差が大きいから完成した潜水艦を進水させる場合に有利ということが分かり陸軍は超大型の乾ドックを作るよう要請、朝鮮機械製作所は同時に 6 隻の潜水艦を建造できる乾ドックを建設したのである。

朝鮮機械製作所 3

潜水艦を建造するという事は、今も昔も一流企業の証とされている。陸軍からの打診を得、乾ドックまで建設した朝鮮機械製作所は沸き立っていた。経験がないためまず技術者を確保しなくてはならない。そこで川崎重工業で経験を積んだ大物 OB をスカウトした。これにより軍の機密である各種潜水艦の設計図を手に入れることができた。さらに資材をスムーズに入手するため、満州(中国東北部)の鞍山昭和製鋼所を何度も訪ね、手はずを整えた。

ところが陸軍からの正式発注がなかなか来なかった。社内では「やはり陸軍が潜水艦というのはおかしい。軍の中にも反対が出ているのではないか。断ってしまおう」という意見も出るほどだった。

発注が遅れたのは日立製作所笠戸工場で建造されつつあった「まるゆ」第一号艇の試運転を待っていたのではないかと推察される。この第一号艇は昭和 18 年 10 月に竣工、年末も押し詰まった 12 月 30 日、山口県の柳井湾で潜航試験が行われた。試験には海軍関係者も招待されていた。陸軍参謀本部は海軍に内密で計画を進めていたが、潜望鏡を発注したことから海軍の知るところとなっていたのである。

潜航試験では、機器のコントロールが難しいらしく朝のうちは艦首が沈むと艦尾が浮き上がり、艦尾が沈むと艦首が浮くという状態を繰り返した。しかし暫くすると艦体が水面下に完全に沈んだ。海軍関係者は「落ちた。沈没した。演習中止」と騒いだが、陸軍関係者は揃って万歳三唱した。これは、海軍の潜水艦は前に進みながら潜水していくのに対し、「まるゆ」は静止した状態で潜水する方式を採用していたためだった。陸海軍で認識が違っていたからで、実権は成功したのである。

朝鮮機械製作所に陸軍から正式発注があったのは昭和 19 年に入ってからだった。横山社長が仁川造兵廠に呼び出され、和氣忠文仁川造兵廠長(陸軍少将)から直接建造の要請を受け、技術将校から計画内容の説明を受けた。本格的潜水艦をイメージしていた朝鮮機械製作所関係者にとっては落胆する内容だったと思われる。利益はそれほど望めなかった。

説明によると「まるゆ」の建造は一カ所で全てを造るのではなく艦体と火砲は大阪造兵廠、光学兵器と音響機器は東京造兵廠、エンジンなど機関は相模造兵廠がそれぞれ生産、大阪造兵廠がそれらをまとめて仁川に送るから朝鮮機械製作所はその他の部分を造って完成させろ、という指示だった。また耐圧隔壁の資材は戦車用に作られた 16 ミリメートルの装甲板を支給するという事も告げられた。陸軍第七研究所が発案した革命的な造船法であるブロック工法についての解説も行われた。ブロック工法は艦体をいくつもの部分に分けて工場で作り、乾ドックに集めてリベットでつなぎ合わせる方式。生産性が非常に高く、戦後の高度成長が終わった後、大手造船会社が世界との競争に敗れ撤退していきな

い。

朝鮮機械製作所での「まるゆ」第一号は昭和 19 年 4 月着工、僅か 4 ヶ月後の 8 月に竣工、進水した。「ゆ 3001」と命名され、陸軍に引き渡された。しかしこの艦には過酷な運命が待っていた。

朝鮮機械製作所 4

陸軍に納入された「ゆ 3001」に乗り組んだのは操船経験がない陸軍兵だった。海についての基本的な知識から始まり船の操縦法も学ばなくてはならなかった。しかも「まるゆ」には計器類があまり付いていなかったから、設計深度 100 メートルがどの位置なのか、体験を積んで身体で覚えないとならないのだった。

仁川周辺で 1 ヶ月訓練した後「ゆ 3001」は昭和 19 年 9 月 8 日、新しく「まるゆ」艦隊の基地として定められた愛媛県の伊予三島に向けて航海を開始した。「潜航はするな。行動は夜だけにせよ」という指示が出ていた。陸軍の船なので旭日旗を掲げないので誤解を招く恐れがある、という理由だった。しかし翌 9 日の夜、朝鮮半島南西部の群山沖で錨を降ろして小休止していたとき、日本郵船の「伊豆丸」(882 トン)が体当たりしてきた。危険を察知して咄嗟に錨を緩めたため沈没は免れたが大破した。「伊豆丸」の船員は刀や鉞を持って「ゆ 3001」に乗り込もうとしていたが、「ゆ 3001」の乗組員が「味方だ、味方だ」と叫んだためやっとな日本の潜水艦と気がつき戦闘には至らなかった。

群山の憲兵隊が調べたが、「伊豆丸」の船長は「付近の海域で米潜水艦に沈められる船が増えたので警戒していたところ、薄暗いなか潜水艦が見えた。海軍に問い合わせたところ当該海域で行動している船はないという返事だった。念のため海軍の全艦船の写真で確認したが目の前にいる艦の資料は無かった。敵の潜水艦であると判断、体当たりで沈めてやろうと思った」と述べた。その後陸海軍それぞれも調査、陸軍では渋い顔をされたが、海軍では「勇氣ある行動だ」とほめられたという。

「ゆ 3001」は群山で応急処理をしたあと、修理のためノロノロと釜山に向かった。途中、日本の輸送船団とすれ違った。ところが船団の最後尾にいた護衛艦が「ゆ 3001」に発砲してきた。艦の前方数メートル落ち、第二弾が後方数メートルに着弾した。そうすると第三弾は間違いなく命中する。「ゆ 3001」は命中を避けるため右へ左へと旋回した。そのとき艦の船腹の日の丸が護衛艦の射撃手の目に入り砲撃はストップした。

護衛艦から「貴艦は何故旭日旗を掲げざるや」と詰問するような信号が入ってきた。「われは陸軍の潜水艦なり」と打ち返すと、長い沈黙の後「安全なる航海を祈る」と発信してきた。これに対し「武運長久を祈る」と返信、護衛艦は去っていった。

二度の災難で「ゆ 3001」の艦体は大きく損傷、釜山で修理してもうまくいかなかった。目的地の伊予三島によやく到着したのは仁川を出てから 40 日後。耐压艦体にヒビが入っていたため予定されていた任務に就くことができず、伊予三島で教育訓練に使われ終戦を迎えている。

長い航海のなかで乗組員たちが悩まされたのは居住空間の狭さと艦内の糞尿臭だった。艦長の部屋でさえ 1 畳しかなく、乗組員は動くのさえ容易ではなかった。また「ゆ 3001」のトイレはドラムカンが置いてあるだけの簡素なもの。普通の潜水艦なら圧縮空気ですぐの外に排出するが、「ゆ 3001」ではそうした配慮が全くされていないのだった。これは「まるゆ」全体の欠陥だった。

朝鮮機械製作所 5

朝鮮機械製作所では「ゆ 3001」に続いて「まるゆ」第 2 号の「ゆ 3002」、第 3 号の「ゆ 3003」を昭和 19 年末から 20 年初めにかけ竣工、陸軍に納入した。

ところがその後の資材や部品が送られて来ないのだった。当初の取り決めでは、資材がなくなると仁川造兵廠に必要な

量を申請、仁川造兵廠はそれを大阪造兵廠に連絡、大阪造兵廠が東京や相模の造兵廠に発注してとりまとめ、すぐに仁川に届くはずだった。朝鮮機械製作所は何度も仁川造兵廠を訪れ「大阪造兵廠に早く資材、部品を送るよう、頼んで下さい」と要請したが、仁川造兵廠の担当官は「黙って待っておれ」と威張るばかり。2ヶ月待っても、3ヶ月経っても資材は届かなかった。「まるゆ」建造は100隻近くになるという情報があったため1300人を新規採用した朝鮮機械製作所にとっては経営的にも大問題である。

そうこうしているうちに「ゆ3002」が訓練航海中、荒天に遭遇し沈没してしまった。仁川造兵廠としても工期の遅れは傍観できなくなってきた。そこで仁川造兵廠と朝鮮機械製作所との緊急会議が20年3月開かれた。仁川造兵廠からは廠長の和氣忠文少将も出席、輸送担当の将校が「大阪造兵廠ではもう随分前に発送したと言っている。こちらとしてはどうしようもない」などと弁明した。これに対し朝鮮機械製作所の資材担当者は「そんなことでは困る。釜山で滞っているのではないかと調べたらどうだ。韓国人の労働者には土下座して煙草を差し上げ、できるだけ早く処理してもらおうようにしろ」と怒鳴った。平社員だったが、和氣少将も黙って聞いていた。この担当者は会議の後、「偉い人が大勢いるなかでよく言った」と重役からほめられたという。

会議の影響もあり仁川造兵廠は大阪造兵廠から発送された貨物の追跡調査を行った。すると資材やエンジンなどの部品は釜山港の岸壁に雨ざらしになり、長期間放置されているのが見つかった。「特別輸送扱い」の荷札は付けられていたが韓国人にはその意味が分からず、緊急とされていた建設関係の貨物を優先して輸送していたのだった。

このトラブルにより朝鮮機械製作所で造られた潜水艦は3隻にとどまり、終戦時は乾ドックに建造中の6隻が並んでいた。そのうち4隻は朝鮮戦争が始まるまでそのままドックに横たわっており、マッカーサーの仁川上陸作戦の記録映画にもはっきりと映っていた。

陸軍参謀本部は400隻の「まるゆ」を建造する計画だったが完成したのは38隻。フィリピンで特攻船として使われ、戦果を挙げた艦もいくつかあったが、全体としては成果をあげることができなかった。

現在の日本は神戸製鋼所、三菱マテリアルと東レの子会社などで製品データの改ざんがあり、日産自動車、SUBARUでは検査に不正が見つかるという品質管理に問題が生じているが、朝鮮機械製作所では各部品の検査が厳しかったようだ。仁川中学10期生で勤労動員された積水化学OBの藤崎弘さんによると、「潜水艦のネジ作りを担当したが合格するのは100個のうち2、3個だけ。腕が未熟だったせいもあるが、検査が厳しかったのは間違いない。それだけ品質管理を重視していた」と証言している。

朝鮮機械製作所 6

昭和20年8月15日の玉音放送の後、仁川がどうなったかについては拙著「降ろされた日の丸」(新潮新書)をお読みいただきたい。しかし軍需工場になった朝鮮機械製作所には陸軍の一個小隊が常時駐留していた。従って他の日本企業のように群衆に襲われることはなかったのではないだろうか。ただ韓国人職員によって朝鮮機械製作所再建委員会が立ち上げられ資産を接收されている。このホームページの管理人、井上浩一氏の祖父で労務課長をしていた森本寛さんが呼び出され、2、3日帰ってこなかったというが、恐らく再建委員会との交渉が難航していたのではないだろうか。建造中だった潜水艦のうちほぼ完成していた2隻は米軍によって仁川沖で爆破処理されたと推定される。朝鮮機械製作所はその後大宇財閥に引き継がれ、今日に至っている。

ここで朝鮮機械製作所の本当の親会社について考察してみよう。創設時の社長が昭和電工の創設者、森轟祖(もり・のぶてる)の実弟、森輝だったことは先述した。そうして親会社のはずの横山工業所社長の横山公雄が専務という奇妙な構成になっていた。役員をみると富国徴兵保険(戦後富国生命保険と改称)の二代目社長になった吉田義輝、三代目社長になった小林中、四代目社長になった佐竹次郎が揃って取締役役に名前を連ねている。さらに根津財閥の重鎮として知られた福島茂富が取締役、須田政道が監査役になっていた。

また朝鮮機械製作所東京営業所は千代田区内幸町2-2だった。現在マスコミの総本山といえる日本プレスセンタービルが建ち、日本新聞協会、日本記者クラブがある場所である。多くの新聞社、通信社が支社を構えている。そしてその隣

には富国生命の本社ビルがそびえている。朝鮮機械製作所東京営業所と富国徴兵保険本社はほぼ同じ場所に在ったのである。

横山工業所については戦後間もなく川崎重工業に吸収合併されたため資料が少ないが、大倉組を経て労働争議で有名な大島製鋼所に在籍していた横山公雄が、郷里・山梨出身の大物、根津嘉一郎に出資を依頼、根津は自分が社長をしていた富国徴兵保険の資金を提供して設立した会社であることが判明した。根津はお目付役として福島茂富を横山工業所の取締役兼取締役に派遣している。

以上から分かるように朝鮮機械製作所の真のオーナーは富国徴兵保険を中心にした根津財閥であり、そこに昭和電工が協力して設立した会社であると考えて間違いない。なぜか、富国徴兵保険は表に出ず、横山工業所を親会社のようにみせかけたのだった。

しかしこれが戦後の日本経済にとって幸運をもたらした。軍需工場に関与していた人は戦後、ほとんど例外なく公職追放になっている。そのなかで小林中は追放を免れ、日本開発銀行の初代総裁に就任した。日本経済再建のため、資金不足のなか、どの業種を優先して資金提供するか見事に采配を振るって傾斜生産方式を貫いたのであった。その後も永野重雄富士鉄社長、桜田武日清紡社長、水野成夫産経新聞社長とともに財界四天王といわれ日本の高度成長に貢献した。朝鮮機械製作所での経験も役立ったに相違ない。ある意味で仁川は戦後の日本経済に大きく貢献したのである。